

1. 修正

- メニュー[チェックリスト保存]-[チェックリスト保存(DXF)]で、図郭別に DXF ファイルを保存する場合、「OK 項目は出力しない」を ON にしても、OK 項目が出力される問題を修正しました。
- TIN の図郭別保存で、急傾斜の細長い三角形が図郭にまたがる場合、消えてしまうケースがある問題を修正しました。
- TIN 参照で、DXF の 3DFACE について 1 点目と 4 点目が同じ場合、1 点目と 3 点目が同じ座標の TIN を発生してしまう問題を修正しました。
- メニュー[アンダー・オーバーシュート]で、端点を移動する場合、移動しなかった端点をチェックリストにリストアップするようにしました。

2. グループヘッダレコード

メニュー[チェック]-[グループヘッダレコード]で、取得年月、数値化区分、精度区分の下位桁を変更する際に分類コードで指定できるようにしました。

グループヘッダレコード

取得年月

取得年月チェック

取得年月をすべて変更する

要素レコードの取得年月も変更する

数値化区分

数値化区分チェック

数値化区分をすべて変更する

1.基準点測量成果を用いる方法

要素レコードの精度区分の上位桁も変更する

精度区分の下位桁

精度区分の下位桁チェック

精度区分の下位桁をすべて変更する

1.1 ~ 50

変更の対象

すべてのグループ

分類コードで指定

選択...

OK キャンセル 設定を保存 設定を開く

3. 点列の順序を反転

メニュー[ツール]-[要素リストアップ]に「点列の順序を反転」を追加しました。該当する面(E1)と線(E2)について、点列

の順序を反転します。

要素リストアップ

データタイプ

- E1 面
- E2 線
- E3 円
- E4 円弧
- E5 点
- E6 方向
- E7 注記
- E8 属性

分類コード

- すべての分類コード
- 分類コードを選択 (1)
- 分類コードを選択 (2)
- 分類コードを選択 (3)

2次元、3次元

- 2次元と3次元すべて
- 3次元
- 3次元で標高値が全て0.0
- 3次元で標高値が-999より高い
- 3次元で標高値が-999より高く0.0より低い
- 3次元で標高値が-999より高く、全て同じ
- 3次元で標高値が-999より高く、一部異なる
- 3次元で標高値が-999以下
- 2次元

図形区分

- すべての図形区分
- 非区分(0)
- 射影部の上端(11)
- 射影部の下端(12)
- 表現補助データ(99)
- 表現補助データ(99)以外
- 0,11,12,99以外
- 定義以外

間断区分

- すべての間断区分
- 間断区分=0
- 間断区分=1
- 間断区分=2~9

面(E1),線(E2)の点数

- 点数は問わない
- 2点
- 3点以上

面(E1),線(E2)の長さ・面積

- 長さは問わない
- 長さを指定(2D)
- 長さを指定(3D)
- 長さの最小値 m
- 長さの最大値 m
- 面積は問わない
- 面積を指定(2D)
- 面積 m²未満

その他の条件

- 注記の数値の小数点以下桁数が1
- 消去年月が空白か0以外

処理

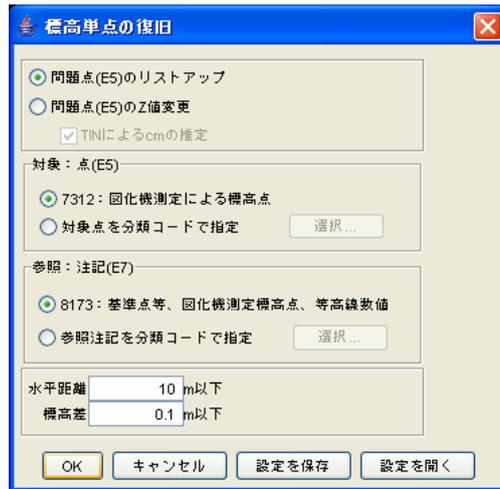
- リストアップ(順次)
- リストアップ(長い方から)
- 該当要素を削除する
- 分類コードを変更する
-
- 間断区分を0にする
- 間断区分を1にする
- 図形区分を表現補助データ(99)にする
- 面(E1)を線(E2)にする
- 点(E5)を方向(E6)にする
- 方向(E6)を点(E5)にする
- 円(E3)を点(E5)にする
- 点列の順序を反転する
- レポートパネル出力

OK キャンセル

4. 標高端点の復旧

新メニュー[一括処理]-[標高単点の復旧]を追加しました。以下、説明書からの抜粋です。

分類コード 7312 などの点 (E5) の標高値が本来の値の 10 分の 1 あるいは 100 分の 1 の場合、近くにある標高注記 (E7) を参照し、点 (E5) の標高値を修正します。



問題点(E5)のリストアップ

標高値が10分の1、100分の1の点(E5)をリストアップします。

問題点(E5)のZ値変更

標高値が10分の1、100分の1の点(E5)のZ値を変更します。

TINによるcmの推定

TIN上でのZ値を参照し、点(E5)のZ値のcmの桁を推定します。

対象: 点(E5)

問題の可能性がある点(E5)の分類コードを指定します。

参照: 注記(E7)

標高注記の分類コードを指定します。数値のみの文字列で、かつ小数点[.]を含む文字列のみを参照します。等高線の標高値は小数点は含まないので除外するためです。

水平距離

点(E5)から注記(E7)の左下角までの距離を指定します。点(E5)からこの距離以下で、最も近い注記を探します。

標高差

点(E5)のZ値と、注記の数値の差を指定します。点(E5)のZ値と近くの注記の数値の差が、この値以下の場合、点(E5)のZ値は誤っていないと判断します。

「問題点(E5)のリストアップ」では点(E5)に注目し以下の処理を行います。

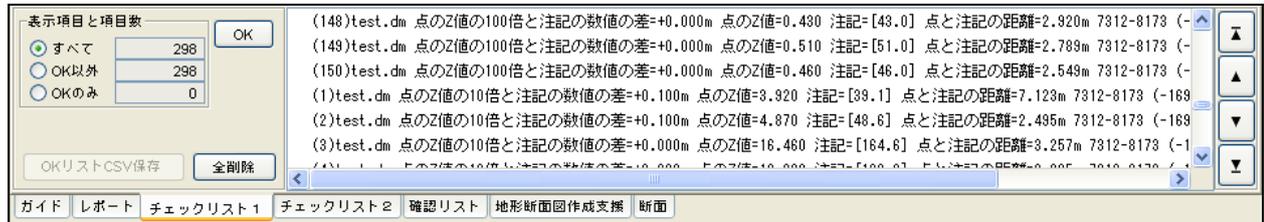
- ① 点(E5)の近くに注記(E7)を探します。注記がなければ[チェックリスト]にリストアップし、処理終了



- ② 点(E5)のZ値と注記(E7)の数値の差が「標高差」以下なら、処理終了。
- ③ 点(E5)のZ値の10倍と注記(E7)の数値の差が「標高差」以下なら、リストアップし、処理終了。標高差が大きい順からリストアップします。



- ④ 点(E5)の Z 値の 100 倍と注記(E7)の数値の差が「標高差」の 10 倍以下なら、リストアップし、処理終了。標高差が大きい順からリストアップします。



- ⑤ 点(E5)について上記以外のケースは判定不能として[チェックリスト]にリストアップ

「問題点(E5)の Z 値変更」では上記③と④でリストアップされた点(E5)に注記の数値をセットします。この場合、注記の数値は 10cm 単位なので、点(E5)の Z 値も 10cm 単位で、cm の桁は 0 になります。Z 値を変更した点(E5)は、[確認リスト]にリストアップします。



標高端点以外の等高線などから作成した TIN がある場合「TIN による cm の推定」が使えます。点(E5)の座標での TIN 上の高さから、cm の桁を推定します。点(E5)の Z 値は cm の桁を四捨五入して注記の数値と同じになる範囲で、Z 値を設定します。例えば TIN がはるか上側にあっても、点(E5)の Z 値は注記の数値+0.04m が限界です。

確認用に[チェックリスト]に TIN での Z 値と注記数値の差が大きい順から点(E5)をリストアップします。TIN での Z 値と注記数値の差が小さい点では、推定が成功しているケースになりますが、大きい場合、目視による確認が必要なケースになります。



5. その他

[データ]パネルの「TIN」ノードのポップアップメニューに「全てピッキング(ON/OFF)」を追加しました。
[チェックリスト 1]について、上下矢印キーで選択項目が上下するようにしました。但し、マウスポインタが[チェックリスト 1]の上にある場合です。